

ポスター

ポスター5

病院情報システム2（部門システム等）

2018年11月23日(金) 16:00～17:00 J会場(ポスター) (2F 多目的ホール)

[2-J-3-3] 電子カルテ情報を利用した病棟薬剤業務支援ツール「病棟患者一覧」の評価

○木下 元一, 鶴飼 和宏, 牧原 明秀（名古屋第二赤十字病院）

【背景】2016年7月に院外処方化を行い、同10月に患者移動情報をもとに病棟毎の患者情報を院内 web上で一覽できるシステムを構築した。【目的】病棟薬剤業務の効率化をはかるため、データウェアハウスや部門システム連携機能を活用した「病棟患者一覧」システムを構築し、その効果を確認する。【方法】病棟薬剤師は、毎日の業務前に患者一覧で情報を把握してから業務を行うこととする。システムは以下の機能を実装する。・服薬指導対象患者のアイコン表示、薬剤情報提供書とお薬手帳の印刷・持参薬報告未登録患者のアイコン表示・使用済麻薬の返却状況表示と確認済入力・患者プロフィール薬剤アレルギー登録状況のアイコン表示・腎機能低下や透析中患者のアイコン表示および処方箋への腎機能検査結果印字評価項目は以下とする。1.薬剤師数と月別の平均時間外2.入院患者の服薬指導の診療録記載率3.入院患者の持参薬鑑別実施割合4.使用済麻薬（内服と外用）の廃棄インシデント数5.成分コードによる薬剤アレルギー登録割合6.疑義照会割合評価は2016年と2017年で行い、1-3は院内処方であった2016年1-6月を除外して算出した。5-6はシステム改修を挟み2017年と2018年を比較した。【結果】薬剤師数は52名から51名になった。時間外業務は月平均590時間から572時間に減った。服薬指導の診療録記載率は82.9%から84.6%、うち退院時服薬指導が占める割合は6.0%から14.8%に、持参薬報告割合は65.7%から69.4%に増えた。内服/外用麻薬のインシデントは6件から1件に減少した。薬剤アレルギー登録割合は2018年末に95%を越えた。疑義照会割合は処方が1.57%から1.64%、注射は0.10%から0.19%に増えた。【考察】服薬指導実施率の増加は、退院時服薬指導の伸びが大きく、病棟で薬剤情報提供書やお薬手帳を印刷できるようになったことによると思われる。

電子カルテ情報を利用した病棟薬剤業務支援ツール「病棟患者一覧」の評価

木下 元一^{*1}、鶴飼 和宏^{*1}、牧原 明秀^{*1}

^{*1} 名古屋第二赤十字病院薬剤部

Evaluation of the inpatient pharmaceutical service support tool using electronic medical record information

Genichi KINOSHITA ^{*1}, Kazuhiro UKAI ^{*1}, Akihide MAKIHARA ^{*1}

^{*1} Department of Pharmacy, Japanese Red Cross Nagoya Daini Hospital

In October 2016, in order to improve the inpatient pharmaceutical service, we constructed a web system that utilizes information of data warehouse and department system and confirmed the effect. The pharmacist conducts business after grasping the information on this system every day. The system has the following functions.

- ・ Display ★ mark at the head of the name of the patient who needs to medication counseling
- ・ Enable printing of medication information list and "Okusuri Techo"
- ・ Display reporting status of bringing medicine ・ Display returned status of used narcotic
- ・ Display status of drug allergy registration ・ Display the result of renal function test

The overtime work decreased from the monthly average 590 hours to 572 hours. Medication counseling increased from 80.4% of all patients to 82.7%. The reporting status of bringing medicines increased from 64.3% to 67.6%. The narcotics incident decreased from 6 to 1 incident. The recording allergy information of drug exceeds 95%. Question inquiries increased from 1.53% to 1.74% for prescriptions and 0.12% for injections to 0.18%.

Keywords: electronic medical record, patient safety, inpatient pharmaceutical service

1. 背景

当院は、2016年に院外処方化を行い、薬剤師の病棟業務に重点をおいた。薬剤師は入院患者の服薬指導の充実と医療安全への貢献を求められるようになった。そこで、病棟薬剤業務の効率化をはかり、業務の充実を目的として、同10月に病棟毎の患者情報を院内 web 上で一覧できるシステムを構築した(図1)。その後、薬剤アレルギー情報や検査値の有効活用のための改修を行った。

2. 目的

病棟薬剤業務の効率化をはかるため、データウェアハウスや部門システム連携機能を活用した「病棟患者一覧」システムを構築し、情報活用の効果を確認する。

3. 方法

病棟薬剤師は、毎日の業務前にパソコンのブラウザを用いて患者一覧で情報を把握してから業務を行うこととする。システムは以下の機能を実装する。

- ・ 服薬指導を実施すべき患者名に★マークを表示
- ・ 薬剤情報提供書とお薬手帳を印刷可能(図2、3、4)
- ・ 持参薬報告の登録状況を「済」と「未」で表示
- ・ 使用済麻薬を返却していない患者をリスト表示
- ・ 薬剤アレルギー登録の異常を色別のアイコンで表示
- ・ 腎機能低下や透析中患者をアイコンで表示

さらに処方箋に腎機能検査結果印字するようにした。評価項目は以下とする。

1. 薬剤師数と期間中の平均時間外および病棟業務時間の週平均
2. 入院患者の服薬指導の診療録記載率(期間中に退院した患者に対し、入院中に薬剤師が記録した割合)
3. 入院患者の持参薬鑑別実施割合(期間中に退院した患者に対し、入院中に薬剤師が記載した割合)

4. 使用済麻薬(内服と外用)の廃棄インシデント数
5. 成分コードによる薬剤アレルギー登録割合
6. 疑義照会割合

評価は2016年と2017年で行い、1-3は院内処方であった2016年1-6月を除外し7-12月の6ヶ月で算出した。5-6はシステム改修を挟む2017年と2018年の6ヶ月を比較した。

4. 結果

1. 薬剤師数は52名から51名になった。時間外業務は3592時間から3385時間に減った。1週間の病棟業務時間平均は、716.6時間から665.1時間に減った。
2. 服薬指導の診療録記載率は78.4%から80.8%に増えた。
3. 持参薬報告割合は61.9%から64.3%に増えた。
4. 内服/外用麻薬のインシデントは6件から1件に減少した。
5. 薬剤アレルギー登録率は95%を越えた(図5)。
6. 疑義照会割合は処方1.53%から1.74%、注射は0.12%から0.18%に増加した

5. 考察

システムへは、毎日90回のアクセスがあり、22病棟中、毎日19病棟のデータが参照されている(2018年8月)。期間内の勤務薬剤師数は減少したが、服薬指導実施率は増加した。特に退院時服薬指導の伸びが大きく(5.5%→18.4%)、病棟で薬剤情報提供書やお薬手帳を印刷できるようになったことによると思われる。医薬品成分コードによるアレルギー登録率は95%を越えた。腎機能障害のある患者への疑義照会件数が増えたことで、疑義照会割合も増えたが、こちらは、処方箋に腎機能検査値を印刷した影響が大きい。電子カルテ情報を有効に活用することで、薬剤師の病棟業務が円滑になるだけでなく、患者安全にも貢献できると考える。

